

叱られし人々

——『当世妙々奇談』私想——

山 本 和 明

はじめに

文政末年から大流行した「妙々奇談」モノ（中野三敏『江戸名物評判記案内』六九頁参照）に連なる作品の一つに、何毛呉館内なる人物の手になる『当世妙々奇談』上下二冊がある。その内容は、「水滸を評して羅貫中馬琴を罵る」「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」「董太史塩河岸に盛儀を訪ふ」（以上、巻之上）、「谷文晁八丁堀に武清に遇ふ」「難語之考浜臣守部を嘲ける」「先哲之話原念齋琴台を説く」「地獄之奇談」（以上、巻之下）の七話より成っており、当代の戯作者・俳諧師・文人などを、理屈っぽく罵倒していて痛快ですらある。そのスタイルは、おおむね「妙々奇談」モノの嚆矢とも言える周滑平『学者必読 妙々奇談』二冊を踏襲するものであった。

当時著名な文人たち七名が、それとわかる戯名で登場し、それぞれの道の先達（故人）が訪れてきて、その俗物ぶりや未熟さを揶揄する。「妙々奇談」の形式の中には、△柴屋落ち▽の要素もふんだんに盛り込まれていたのである。しかも先人の納得のいく主張が、大いに物議を醸しだし、続編の類が綿々と続いたという。その諸相は、『江戸名物評判記案内』に詳述されるところでもある。氏は「妙々奇談」モノの背景・特徴を次のように総括しておられる。

「妙々奇談」モノの特色はもっぱらアラ探し、揚足取りの辛辣さにある。天明期までの評判記が、何はともあれ賞め言葉を先行させたのに比べて、こちらはいわば「悪口組」の独壇場とも言えよう。これは何といっ

ても対象となる学者・文人の生活そのものが、市井の垢に汚れ、またそのような汚れを隠さなくなつてアラ深しの種が多くなつたということが第一の理由であろう。そしてさらにその根本には、卑俗化し市井化した戯作そのものの特徴として、より刺激的な、より攻撃的な表現や描写が好まれるという傾向が存在するのである。何はともあれ賞めようという応揚さが姿を消し、何が何でもけなしつけようという癩癖性が台頭する。一言でいえば、それだけ近代が近づいたということなのである。

〔江戸名物評判記案内〕 一六九頁

こうした「妙々奇談」モノの面白みは、先述のようにその刊行時に生きている同時代の著名人を、過去にその分野において大成した故人たちが厳しく叱責するという点にある。その際、故人によつて語られる「事実」は、当然のごとく読者にとつて「さもありなん」と思われるものでなければならぬ。あるいは、故人が生きていたらこういつたであろうと云う内容でなければならぬ。そうした誹謗中傷であればこそ、批判の対象の著名人達にとつて、憤慨すべきなにかが備わるのであろうし、物議をおこして当然となるのだろう。そうした当代戯作者・文人たちへの挑発的文言が、たしかに作品の価値のひとつであつた。

一方でまた、こうした内容を備えたものが、刊行物として呈示されたということの、意味するところは大きい。例えばこれが日記であるとか、書簡と言う形で私的に残されたものであつたならば、それは、執筆した者の憤激のありようや考え方を、今日、研究という名のもとに私たちは、のぞき見ているにすぎないだろう。あるいは書簡のように、ごく限られた者たちに対してのみ開かれた形で、己れの見解を示すという場合も想定されるが、これも少数の限定された読者を想定したものであつた。

それに対して、多数の読者が想定されうる刊本の場合、匿名の作者による当代の著名人への誹謗中傷が、大多數の読者の眼前に呈示されることになる。ならば、「楽屋落ち」が楽屋ならぬ公衆に開示されることになるのではないか。

そこには、読者にとつても新しい情報、暴露話、さらには捏造された偏狭な見解などが示されることになるだろう。それだけではない。「楽屋落ち」の内容が真実と思わせるほどに、「読者」に対する説得力という意味合いにおいて、納得しうる「さもあらん」と考える△事実▽が多くちりばめられることになるのではないか。むしろ後者の点に私は深く興味を覚える。

論者の興味は、こうした書物において、当然のこととさりげなく記された事柄、誹謗中傷の類を成立させる、当時△事実▽と目されていた「噂」話の側にある。当時一般に広く知られていた、知りえた内容も、時代の経過とともに薄れていく。だとしたら、匿名による一方的な「悪口」であつたとしても、背後に潜む当時の状況を伺う資料としての価値を、もっと再認識してよいのではないだろうか。

従来の研究において、このことは見る視線でことなつてくるようである。例えば藤田徳太郎は次のように述べている。

「妙々奇談」や「しりうごと」に較べると、その内容は著しく貧弱で、前二者程に学問のある人の著述とは思はれない。罵らんがために罵つたやうな所がある。

（「妙々奇談」『国語と国文学』昭和六年二月）
藤田氏は「罵らんがために罵つた」悪口としての側面を見ていた。近年、こうした見解とは別の視点から、「妙々奇談」モノの意義は再確認されつつある。

匿名作者が、当代の文人や戯作者等を罵倒し扱下したもので、齒に衣を着せない毒舌は読む者の苦笑を誘う。かつての古きよき時代の黄表紙に見られた△がち▽や△楽屋落ち▽ほどの品がよくないが、幕末の△悪摺▽ほどはひどくない。いずれにしても文人界や戯作壇に精通していなければ書けない内容であることに違いはない。あるいは書肆がこれらの情報の接点に立っていたのかもしれない。

「罵らんがために罵った」ものとしてみるのではなく、「文人界や戯作壇に精通していなければ書けない内容」とみるのである。高木元氏は、有力な当時のことに精通する作者像を想定していることから、書かれた情報に重きをおいてみておられる。

思うに、こうした誹謗中傷の書であればあるほどに、それを成り立たせる多くの〈情報〉が鑲められている。以下、そうした〈情報〉という観点に注目しつつ、興味の所在に基づき二・三、私感を述べてみようと思う。

検証され得る〈情報〉

各々の話において、話題となっている事柄は、一体どの程度確認しうるものなのだろう。当時の資料を通じてそのことを確認してみたい。まずはじめに、巻之上「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」を取り上げることにする（なお、『当世妙々奇談』本文は、別途研究論集において翻刻を行っている。適時ご参照いただきたい）。

「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」は、芭蕉一五〇年忌に様々な行動をして芭蕉を神として崇め、自らの権威付けに役立てた俳諧師鳳朗に対し、芭蕉の霊が一言非難するとともに、当代の俳諧師たちへも苦言を呈するといった内容の話である。

鳳朗は鶯笠・自然堂と号した俳諧師で、『芭蕉葉ぶね』を刊行するなどし、真正蕉風を宣言した。文政一二年からはしばらく上方を歴遊し、江戸に戻ってからは自然堂を設けて鳳朗と改号。芭蕉一五〇年忌の天保一四年（一八四三）には、京の二条家に請うて芭蕉に「花下大明神」の神号を許され、自身も「花下翁」の称を受けている。梅室・蒼虬とともに天保期を代表する俳諧師であり、その足跡は中村俊定「田川鳳朗」（明治・俳句講座3）などに詳しい。

さて『当世妙々奇談』に記された内容に関わる事柄は、当代の読者たちにどう映っていたのだろうか。幸い近年発表

された富田志津子氏の論考「二条家俳諧―宗匠の系譜―」（近世文芸七〇）に、鳳朗を巡る事情が詳述されている。以下、それに拠って検証してみる。

それに従えば、鳳朗の申請により、芭蕉は「花本大明神」の神号が贈られ、鳳朗自らは二条家より「花の本」が免許されたという。「去綴紳家より花の下大明神とあがめまつるべきよし御さしづありける」（上九ウ）とは二條家のことであつた。既に百回忌の際に「正風宗師」が二条家より追号され、權威を付与されていた芭蕉であるが、さらなる神格化がなされたのである。このことは、二条家にとつてみても、絶対權威の在り処として、その存在を人々に再確認させることになつたと富田氏は述べておられる。「花の本」の免許も芭蕉追号も、權威をほしがる側と權威を与えることで自己の存在意義を知らしめようとする側との、双方の思惑が一致した出来事であつたと言えるのかもしれない。五十余年ぶりの「花の本」復活と、芭蕉の神格化ということにより、芭蕉百五十回忌は二条家にとつてみても意義深いものにほかならなかつた。

天保一四年九月に、芭蕉神号の「御開眼之御俳諧御連歌」が、鳳朗の御文台開と兼ね併せて行われ、その後鳳朗は、伊賀上野まで出向いて、芭蕉追号を告げている（『声の葉』『名録』、以上富田論文に従う）。『当世妙々奇談』中に芭蕉の言葉として、「鳳朗とも云白痴いっそや遠忌のせつ駕籠にのつて廟前へ来りしことあり」（上十一ウ）という記述があつたが、このことを指すのであつた。

こうした鳳朗の行為に対して、梅通『舍利風語』（弘化二年刊）の「麦慰舎随筆」は厳しく批判の言葉を投げかけている。

近頃、ある者、形客来舶人の如く異体にて、しらべ空言を吐、雑俳を売、愚昧をあざむき、虚名をもとめてつひに堂上に入、自分花の本宗匠の号を免され、芭蕉翁に花の本大明神の神号を申下して、世上に流布す。かなしきかな、芭蕉老人一世に明眼を開き、風雅のもとをさぐりて四海に弘通し、乞食頭陀の境界をあまんじ、末代の

愚民を向上の一路にみちびきたもふ。其高德を覆ひ隠さんとはかる事、何ぞや。たゞ己が名利にかゝはりて祖師の大意をしる事能はず。人をして迷倒なさしむ。にくむべき事なりかし。

さて、この梅通の批判は、一面において、鳳朗の身勝手な行動を良くは思わぬ俳諧師たちの意識を表しているのだとも言いうるだろう。富田氏によれば、これには裏事情があるとのことであった。

では『当世妙々奇談』は、梅通同様、そうした俳諧師たちの声を反映させたものであろうか。おそらくそうではあるまい。なぜなら、さらに進んで、「末代の愚民を向上の一路にみちびきたもふ」というような芭蕉崇拜そのものまでも、芭蕉自身の言葉に仮託して批判を重ねているからである。『当世妙々奇談』より引用する。

我生前風流のこゝろえたがいよりあらぬ乞食のまねをして大切な主人の禄をすて世界をまごつきあるきしこと死後甚めんひなくそんじいまでも藩中に発句俳諧などするものあればまた我まねをして人の家で死やうなめにあはねばよいとかげかならなげかはしく思ふほどのことにて実に俳諧ほど世上につまらぬものはなけれど

(上十オ)

われ生前このみちにふけり主人の家を出て不忠不義の人となりしといまさらふかくなげき後悔千万にぞんずるところなれば何どぞ人も俳諧などせぬやうにしてすこしは世上の用にもたつべき道をまなかしとおもふところなり

(上十六ウ)

その意味で、当代の俳諧師たちの言動にも、批判的に関心を払っている人物の手になるものといえる。そうした認識は、決して一部のものではなかったはずである。『当世妙々奇談』のこの話をみて、ニンマリとした読者は少なからずいたはずなのだから。

ともあれ、本話に示された端々の内容に関して、全くの虚偽りの虚構の話題ではないことは確認しうるだろう。ち

なみに本話の場合、もう一つ注目されるのに鳳朗の没年のことがある。鳳朗は弘化二年（一八四五）十一月二十八日に没しているが、このことは成立年次を明らかにしない『当世妙々奇談』の成立時期をも推定させるものとなっている（この点は後述）。

*

もう一つ別の例を確認したい。ここでは巻之下「先哲之話原念齋琴台を説く」を取り上げるが、いわば出版に関わる株の問題が話題となっている。原念齋は名を善、字を公道と言い、山本北山門人。文政三年三月十九日に四十七歳で没している。『先哲叢談』の著者として夙に知られる処である。批判される側の東條琴台は、名を信耕・耕、字は子藏、通称文左衛門。琴台・吞海翁とも号し、山本北山・亀田鵬斎・大田錦城などに師事し、弘化四年（一八四七）、高田藩の儒臣となっている。明治十一年九月二十七日没。享年八十四歳であった。著に先哲叢談後編八巻・先哲叢談続編十二巻・同序目年表一卷などがある。

『当世妙々奇談』には、既に亡き原念齋が、既に『先哲叢談後編』（文政十年序）を刊行しおえ、いま続編を刊行しようとしていた琴台に対し、「先哲叢談の株は某へ御かへしくだされ書名御とりかへくだされたし」（下十六オ）と意見を述べているくだりがある。

書肆慶元堂主人の求めによって、儒者東條琴台が『先哲叢談』後編を仕立てた旨は後編序・例言に明らかである。

余向草儒林小史。閑散分宜記二書。專以知三百年來。儒林文苑士之事實為主。上自廊廟縉紳。下及山沢隱逸。

（略）乙酉之歲。書估慶元堂。見余二書稿本。將刻布之。其卷帙浩辭。以不便于劖磨。故請就二書中。繁簡執中。

約為二十四卷。換改名題。曰先哲叢談。又摘各家生卒年月。出處居趾之要者。以為年表焉。余既應其所請。襲用

原公道著目。曰後編曰續編曰餘編。每篇八卷。別作年表一卷。校訂畢成。授之慶元堂矣。

（『先哲叢談後篇』序より抜粋）

○此編は本と先哲叢談を讀んで、事實を搜索する者の爲にす、故に収録する所の人物も其數に盡く、續餘兩編載する所一百四十四人、其稿既に成りて篋底に藏し、未だ全く世に刊布せず、頃者慶元堂懇に數人を刪補し、新に鬼録に上る一二の巨儒を増入せんと請ふ、余之を許諾し、再び遺事を摺摭す、淺見薄聞、蒐輯未だ了らず、別に此書を纂め、大要を總括し、各家の事歴をして此に瞭然たらしむ、既晦を先修に闡發し、未顯を後進に開發する能はずと雖も、讀者は各家の年代、彼此臚連、早晚甄別して、以て尚論の一助と爲すに庶幾らんか
文政丁亥冬十月既望
東條耕記す

〔先哲叢談後篇〕例言より抜粹）
また『雅俗』掲載論考「先哲叢談衆議」によれば、慶元堂が琴台を念斎の子息徳斎の許へ携え、『後編』の出版承知を求めたとのこと（資料未見）。徳斎は二人の要請を受け入れ、先人の遺稿と、資料集『史氏備考』をも提供したが、琴台はこれを用いなかったという。

既に指摘あるところであるが、『慶元堂書記』を見ると、念斎逝去と同じ文政三年三月に、原家は、金十一兩と引き換えに、家蔵の『先哲叢談』板木株式いっさいを書肆慶元堂に売り払っている。参考のため該当箇所を引用する。

一、先哲叢談 式軒之一軒まへ／墨付百八丁

右は我等所持の板木株式此度貴殿へ売渡代金拾老兩也、唯今慥に請取申候、然る上は右板木に付故障等一切無之候、後日のため証此の如くに御座候 已上

文政三年／辰三月

売主 原三右衛門
証人 和泉屋庄次郎

松沢孫太郎殿

〔松沢老泉資料集〕四七頁）

『当世妙々奇談』の記す内容は、株譲渡といった限られた人々の知りうる話題を、知った上での作りごみであるとも読める。本話の時代設定が、『先哲叢談後編』刊行後にあたる文政十年以降であり、早くから琴台が統編執筆にかかっていたことは序文にも明らかであろう。ただ統編の出版に至らぬままに、琴台は天保改革中に取り締まられてしまった。嘉永三年に自著『伊豆七島全図』が発禁となつて以来、著述出版をも差し止められていた経緯があるにせよ、なぜか『先哲叢談統編』十二巻六冊は、琴台没後の明治十六年になつてから刊行されるのである。統編に掲載する琴台識語に言う、

向に書估慶元堂甘泉生、余が措散分宜史を以て、奇貨置くべしと爲し、之を刊布せんことを請ふ、乃ち謂つて曰く、原念齋が先哲叢談、世に顯ると雖も、其収載する所、僅に七十二家、鉅匠名流遺漏少からず、後を繼ぐの志あるも、未だ果さずして歿す、僕貴著を読む、宏覽博采、敘事明暢、佳致最も多し、願くは書目を換へ、倣うて後編と作さば、則ち傳播極めて廣まらん、僕の生理の大幸なりと、余素と人の眼脚に依るを欲せず、苦辭すれども允さず、輸寫欸誠、至らざる所なし、希合數回、峻拒すべからず、遂に其請に應じて、體裁列に従ひ、敢て其美を襲はずは、以て先鞭の功を對揚するに足らん、念齋、若し之を知るあらば、豈に悦ばざらんや、生、時情に諳んじ、甚だ貨置に巧にして、劖劂速に成り、初め二千部を刷版す、是より先、坊刻諸書、未だ期年に及ばずして、賣售繁夥、未だ曾てあらざる所なりと云ふ、生、又懇索して、斯編暨び餘別遺三編各十二巻あり、亦陸續之を開雕せんと欲す、故に斯編を以て、劖劂に授く、嗚呼余と志を同じうする者、賢を懿言卓行に希ふあらば、則ち必ずしも小補なしとせず、

一方で、校訂凡例に示された出版経緯を掲げるなら、

一、曩時原念齋、先哲叢談を著す、已にして琴臺東條先生、之が後編を作り、且つ將に續編・餘編の作あらんとす、其續編纔に稿を屬す、而して先生下世す、余の東京に居る、先生の嗣子信升と、門に對して居る、朝夕相見

え、談偶々之に及ぶ、信升、乃ち囑するに、斯の編を以てす、曰く此れ先人の遺著、未だ稿を畢らざる者なり、子幸に校正して、諸を世に公にせば、亦善からずや、余是に於て、二三の同好と、相與に魯魚を訂し、以て劖斲氏に授くと云ふ、

琴台識語の如く「斯編を以て、劖斲に授」けられていたのか、校訂凡例の如く「此れ先人の遺著、未だ稿を畢らざる者なり」なのかは定かではないが、後篇から続篇にかけての間隔の長さを思うとき、その背景に『当世妙々奇談』の語のような出来事が、例えば徳斎との間に生じていたと、まことしやかに想定する者がいてもおかしくはないのだろう。事実云々ではない。あくまでも可能性の問題である。琴台という人物を巡っては、そうした悪い噂が多分に起り得たことも一役かっている。『当世妙々奇談』に示された、琴台を巡る噂の箇所を引用する。

書買をだまかし山師のごとき行をせられ遂に先輩に擯斥せられ鄙劣な了間を出して度々書画会の催りあるひは扇面亭と同謀にて人名録をこさへ金百疋の入用を出せば非人でもかまはず録中へ加へ
(十四才)
これを裏付けるように、たとえば嘉永四年、平氣亭『妙々戲談』上巻に次のようにある。

亀井戸辺に卜居する文盲山人と呼べる者あり。年々歳々番附を著はすこと数限りもなし。最初の内は、文人水滸伝、文人評判記の、或は名流品藻、又は芸苑名家競の、和漢各体歌鑑の、又は名物流行鏡などを綴り、文人より一朱二朱づゝ貪りしが、其番付に載せられし文人達も、面には渋々しながら、己が名を売る梯子ぞと、遂懷中よりひねり出し、やれば戴く文盲三人、夫よりして此頃、寿命付と標題せる古今不思議の番付を拵え、又文人魚尽、文人花の顔見世あり、扱々歎かはしきことなり。(略)其慾の深きことは彭湖海よりも深く、書画会の世話役、文人の畠荒し、琴大杯と同店にて、爪の長きこと計知るべからず。そこで、青軒杯といふ才子は、早く其機を見て、入口に、書画会出席一切御ことはり申と云札を出せり。

ちなみに文盲山人とは畑銀鷄、琴大は東條琴台、青軒は寺門静軒のこと。このことを指摘した石井研堂(『新編雅三俗

四」書誌学月報別冊4）は次の如く評している。曰く「銀鷄真に此の如き人物ならんには、今日の所謂羽織ごろつきにて、人類中の寄生虫とや謂はんか。」と。言うように、琴台とて同様の存在に他ならなかった（文人の畠荒し、琴大杯と同店にて）。『当世妙々奇談』に登場する人物達の周辺には、それなりにまことしやかに語られる土壌があつたといふべきなのであらうか。

話の信憑性―問題の派生へ―

以上みてきたように、各編において故人の語る話題には、多かれ少なかれ当時においても確認しうる事柄であつた。さりげなく記された人事実／＼に基づき、故人の力を借りて当代文人戯作者達を揶揄する。それが、刊行され公にされることで、より一層人々の知るところともなつたのであらう。

だとすると、問題を孕むことになる。記された事柄の中には、今日我々から見れば、大きな問題となりうる事が、さりげなく記されているからである。たとえば巻之上「難語之考濱臣守部を嘲ける」に示された「長歌撰格」盗作説はどうなるのだろうか。この事に関して、従来、つぎのように述べるにとどまつている。

長歌撰格の事など、事実とは思へないが、守部の存生中、長歌撰格は遂に上梓せられなかつた。さて、清水浜臣が特に守部を詰つたといふに就いては、両人の間の不和の事が思ひ出される。濱臣と守部は交友親しかつたが、後両人は不和となつた。守部の家集「穿履集」に「おのれ幸手にすみける比、清水濱臣いと心ぎたなき事のありけるに、よみてつかはしけるうた」が出で、また「此後濱臣たび／＼とひきて、ひたぶるになだめければ」とて短歌を載せ、「とはいひつけけれど、猶やう／＼うとくなりにけり」とも記してゐる。温厚な浜臣と心中覇気を蔵する守部とが、若くして相よく、遂に絶するに至つた消息は、温和な伴信友と、覇気ある平田篤胤が、始め水魚もただならぬ交を続け、後絶交するに至つたのと、その間の関係が似てゐる。兎に角、「当世奇話」に、濱臣をして、

守部を罵らせたのも、此の間の消息を知る人の手になったものであるからであらう。（以下略）

（藤田徳太郎「妙々奇談」「国語と国文学」昭和六年二月）

橘守部は、池庵・生葉園・椎本などとも号した国学者で、天明元年（二七八一）四月八日出生まれ、嘉永二年（一八四九）五月二十四日に、六十九歳で没している。従来師承なしとされていたが、浜臣の門人であったことを、国会図書館所蔵『莞翁歌話』によって丸山季夫が明らかにしている。その浜臣と後年不和になったことは『穿履集』などの資料に明らかである。その二人が『当世妙々奇談』に登場するのである。

序・跋の記載から、守部存命の時には刊行されず、明治六年に刊行された『長歌撰格』ではあるが、本文末尾には「守部帥／文政二年三月」と記されており、早くから成立していたことが想定しうる。だが、なぜか出版には至らなかった。他の「撰格」が刊行されているにもかかわらず、である。このことに対して盗作との見解を示す『当世妙々奇談』の説を、藤田徳太郎のように「事実とは思われない」として、果たして一蹴してよいものだろうか。しかも当代の読者のみならず、守部自身もまたこの『当世妙々奇談』を読みうる立場にいたのである。さらに言えば『当世妙々奇談』の作者は、未だ刊行されぬ『長歌撰格』の存在やその背景をも知っていたことになる。その意味でも甚だ興味深い話といえるのではないだろうか。

*

私にとって、もつとも興味を引くのは上之巻「水滸を評して羅貫中馬琴を罵る」に記された京伝馬琴の不和説をめぐる話柄である。

此外京伝と絶交して今の京山などへは存外の無沙汰をしながらせん年書画会をなすとして配りものを持参して京山を訪たる始末など市井の匹夫もなさるところなり

（上九才）

『当世妙々奇談』の中では、京伝馬琴不仲という噂は、当然人々の知るところであつて、むしろ書画会一件の方に重きをおいているようである。このことは、なにを意味するのだろうか。高木元氏のように、二人の対立を書肆によつて演出されたものとするなら、書肆により流布された△噂▽の反映なのだとも言えようが、今はむしろ、そうした△噂▽が刊本という形をとつて流布していたことに興味をもつのである。

噂が、如何なる媒体を通じてなされていたかという点は、これまであまり重要視されてこなかったように思う。せいぜい研究史的立場から言えば、京山の写本「蜘蛛の糸巻」の存在に注目するばかりであつた。これが近世後期とはいえ、馬琴存命の時に刊行物のなかに示されていたということならば、当代の人々の知りうる情報であつたという点で、また当時の人々にとつて信憑性のもつた噂として流布されていたという点で、やはり注目してよいのではないだろうか。

*

さて、こうしてみると、如何にも書肆ならではの情報が多くちりばめられていることに今更ながらに気づく。

しかるに当時戯作者種ざれにて今作者になればよい時節なりとて無下に文盲な輩できもせぬくせに筆を弄し頻に思案をこらせどもと腹にないことは出来やう道理なければ今の十返舎一九・柳下亭種員・万亭応賀・松亭金水・二代目春水・画工英泉など毎朝われ／＼が霊をまつりて何卒戯作上達いたすやうにとていのほどにわれ／＼もうるさくおもひ此間中より鬼丈をほやうにつかわし彼ともがらの形骸へいれおきたりかの輩六人ともに鬼丈の魂とりつきいたれば定めて種々のうはことをならべたて嚙かし世上のものわらひならんとて毎日うはさをいひくらせりとあるに栄久主人はじめてこのもとをしりさては左様にて候かいかにもうはこのやうなつまらぬものばかり出来いたし候根本を承り初めて疑心氷解いたしたり

(下十九才)

下之巻「地獄之奇談」の一節である。書肆栄久堂山本平吉が地獄で京伝などに会い、当代の戯作界の動向を伝えると

いう構成は、甚だ興味深い。その内容からも、『当世妙々奇談』の作者「何毛呉館内」は、書肆周辺に関わる者と想定してよいだろう。この当時存命の作者達の中で、「地獄之奇談」などに批判される作者達を除いた時に、残る作者でかつ俳諧をはじめとして様々な分野との交流（あるいは裏事情）を知りうる人物、かつ馬琴に対する批判の口先を巻頭においていることから、私は京山辺りを作者に想定してみたい衝動にかられるのであるが、これはあくまでも私想の域を出ない。

作品成立に関わる問題

ひとまず作品の成立時期を押さえてかからないと、作者云々も言えないだろう。しかし、本書そのものの成立を巡って、今もって定かではない。株仲間解散令の影響もあつてか、成立時期を明らかにしないように、刊記をもたぬ際物として成立していることも関わりがあるのだが、時期を特定しうる材料に乏しいのである。そうした点を、諸本を検討するなかで考えてみようと思う。

現存する本書には、いくつかの書名が与えられている。例えば京都大学蔵本の場合、次のような書名で収蔵されている。

① 京都大学附属図書館谷村文庫（四—四三コ）

* 目録記載書名「才子必読 弘化奇話」

* 題簽「才子必読 当世妙々奇談」

② 京都大学文学部図書館エバラ文庫（D164）

* カード「才子必読 当世奇話」

* 帙・題簽「才子必読 妙々奇談」（乾坤二冊）

③ 京都大学文学部図書館 (p150)

* カード「妙々奇談」

* 題簽「才子必読 妙々奇談」(乾一冊のみ)

確認するに②と③は表紙は異なるが、同じ系統。①と山本が研究論集にて翻刻したものとが同じ系統のものである。他にも存在する。例えば、藤田徳太郎による論考「妙々奇談」(『国語と国文学』昭和六年二月)では、次のような記載がみられる。

而して、国学者漢学者戯作者を交へて、誹謗した書に、「才子必読妙々奇談」乾坤二冊の書がある。題簽には、かくの如くあるが、内題には「才子必讀当世奇話」とあつて、初篇卷之上、卷之下の両冊となつてゐる。二篇以下は多分出なかつたのであらう。何も呉館内著とある。(中略)太平萬年冬至之日、水鏡山人撰の序文がある。水鏡山人の名も、矢張り「妙々奇談」より借り来つたものである。

残念ながら水鏡山人の序文掲載のものは未見。しかし藤田論文中に引用された標題作は、その内容をみても正しく今回考察する『当世妙々奇談』に他ならない。つまり題簽に「才子必読妙々奇談」、内題に「才子必讀当世奇話」とあるものが存在し、それになお「太平萬年冬至之日、水鏡山人撰」の序文を有するものが存することになる。これらを確認した上で整理するならば、次のようになるうか。

A 外題「才子必読 当世妙々奇談」上下・内題「才子必読 弘化奇話」(①・山本架蔵)

B 1 外題「才子必読 妙々奇談」乾坤・内題「才子必読 当世奇話」(②・③)

B 2 外題「才子必読 妙々奇談」乾坤・内題「才子必読 当世奇話」・水鏡山人撰序文有り。

先掲のように、高木元氏はその論考中で、本書のことに触れているが、内題に「当世奇話」とあるものの方を改修後印本(即ちB群)とされた。

弘化年間「随」才子必読弘化奇話 中二巻二冊 何毛呉館内著 架蔵

*画工板元刊年不明。『才子必讀當世妙々奇談』（外題）

という、所謂妙々奇談物の末流に位置する作品の一つである。（中略）所見した下之巻の内題は「才子必讀當世奇談初篇卷之下」と、「弘化」に入木し「當世」とした改修後印本。内題下に「何毛呉館内著」とある。この名を『国書総目録』の著者別索引では「なにもくれとうない」と訓んでいるが、「いづれもごあんない」と訓む方がふさわしい。全部で七つの小話からなり、最終話を除いて各一葉の挿絵が入っている。

（『江戸読本の研究』五〇八頁）

実際に刊本をみれば一目瞭然なのだが、B1の場合、埋木によると思われる箇所が存在している。内題・尾題に記載される「当世奇話」の「当世」がそれである。版面からも他の箇所と比して字体が異なるし、明らかに入木された痕跡をみることが出来る。そのことを考えてみても、B系統はA系統の「弘化」を「當世」とした改修後印本として良いだろう。

わずかな改修であるが、ではなぜこうした「改修」がなされなくてはならなかったのか。序文から引用し、成立時期、改変の問題を考えてみたい。序文中、次のような一節が存在する。

時晨鐘一声、睡魔正去、座客不在、祇聞戸外啾々之声、蓋鳳朗已死、恐其鬼哭、

「蓋鳳朗已死、恐其鬼哭」という序の言葉は、弘化二年十一月二十四日に没した鳳朗の死を踏まえてのことであった。一編中の登場人物にすぎない鳳朗の死が、序に記されていることは甚だ気になる。また「地獄之奇談」冒頭に「弘化二年のことなりし栄久か主人身まかりて冥途の旅に趣けるが」ともあり、ともに弘化二年という具体的な年次を踏まえての話題となっている。「弘化奇話」と題された本書の成立を考える時、少なくとも弘化二年十一月以降の弘化年間、即ち弘化三・四年に絞れるのではないだろうか。

本稿冒頭にも述べたように、こうした「妙々奇談」モノの構造は、死んだ先達が現今生きている文人・戯作者達に對し意見を述べるところにあると考える。例えば「地獄之奇談」の場合、死んだ書肆主が、故人の戯作者のもとを訪れ、実世界の戯作者の悪口を言うという趣向となっていて、一見例外的とも思えるが、直接的であるか否かを問わないなら、現世のものを故人が批判するという意味で、同じスタイルとして良いだろう。問題となるのは、鳳朗の場合である。想像の域を出ないが、あえて序に記すということは、『当世妙々奇談』の著者にとって、鳳朗の死は予想だにできなかった事柄だったのではなかったろうか。つまり「俳諧を論じて桃青翁鳳朗を懲らす」では、ともに故人なのである。生きていて揶揄されるべき人物が死んでしまつては、こうした話の枠組そのものが成り立たなくなるのは当然のことであろう。予想外のことは言え、鳳朗の死は、『当世妙々奇談』に当初から致命的な欠陥を生じさせてしまった。また、時代が弘化から嘉永に変わるとき、「弘化奇談」という限定的な時代設定は古びたものに映ることになる。『弘化奇談』から「当世奇談」に埋木修訂された理由も案外そうした点に理由を求めてよいのではないか、と考えるみたい。

とまれ、本書の内容を今一度検討してみること。幕末期に記された様々な「妙々奇談」モノを巡つては、そういった観点から光を当ててみることで見えてくる問題も多く存在するのではないだろうか。本稿はそうした問題意識をもつて私感を述べてみた。

※なお、引用文中、今日からみれば不適切と思われる表現も含まれているが、研究上、そのまま引用させていただいたことを附記しておく。